二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版
学園付舞人
剣崎真琴
つるぎざきまこと
GAKUEN-SHIMAININ
TSURUGIZAKI-MAKOTO
小説 狩野一景
挿絵 池田靖宏

第一章　仕舞人、剣崎真琴!!　006
第二章　淫欲鍼の乱舞!!　057
第三章　悦辱魔人の魅眼　115
第四章　淫辱の仕舞人　172

登場人物紹介

Characters

剣崎(つるざざき) 真琴(まこと)

八堀学園に通う高等部生。学園内に潜む悪に立ち向かう“仕舞人”のリーダー。実戦剣術の達人。

緒方(おがた) 寧(ねい)

真琴の同級生であり、彼女と一緒に“仕舞人”として学園の悪事を成敗する。鍼術の達人。

城島(じょうしま) かんな

真琴や寧と一緒に、学園の悪事を成敗する“仕舞人”の一員。リボンを自在に操り敵を締め上げる。

十六夜(いざよい) 鏡也(きょうや)

学園の生徒会長。真琴たち仕舞人のことを煙たい存在に思っている。

第四章　淫辱の仕舞人

泥のプールから浮かび上がるように、重苦しく意識が戻ってきた。鉛と化した瞼をこじ開けると、剣崎真琴の視界にぼんやりと見慣れた姿が映る。

「寧……？」

自分のものとは思えない掠れた声で、肩にかかる髪を桃色に染めた物憂げな友、緒方寧の名を呟く。

「あぁ、やっと目、覚ました……」

微かに震える彼女の声を聞いた途端、一気に記憶が蘇った。邪悪な『魅眼』によって、学園支配を目論む生徒会長、十六夜鏡也から受けた耐えがたい辱めを。

「あああっ！　あ、あたしっ!!」

恥辱と嫌悪が寝ぼけた意識を叩き起こした。恐るべき敵の姿を探して身を捩ったそのときだった。

「――!!　はわぁああっ!?　くぁはぁあ――っ！」

壮絶な雷撃が、股間から脳天へと突き抜けた。腰が砕けそうな脱力感に膝を震わせ、蹈(た)鞴(たら)を踏む。

「んくぁああっ！　だ、だめぇっ!!」

「ひぁあああぁっ！　やぁっ!!　やだぁああっ！」
目の前の寧が切羽詰まった表情で上体をくねらせる。彼女の背後、ツインテールに金髪を束ねた少女も、愛くるしい身体を小刻みに痙攣させ喘ぐ。
「か、かんなも……。くふぅ、なに……これッ？」
まずは友の姿を確認し、真琴は股間を悩ませるものに目を移す。細いピンク色の布紐がスカートの裾を大胆にめくり上げ、陰部に深々と食い込んでいた。
「こ、これって……かんなの、リボン……!?」
ここは彼女たちの教室であった。向かい合わせに真琴と寧。その寧の背後にかんながこちらを向いて並ばされ、ピンと張られたリボンを跨がされている。気を失っている間、真琴の身体は寧が支えていてくれたらしい。肩を彼女の両手がしっかりと掴んでいた。
藍色のネクタイを胸元に結ぶ白いブラウスと、チェックのミニスカートの制服はあの陵辱のときのまま、濁液に濡れ破けていた。
特に真琴の衣服は愛刀鈴斬によって切り刻まれ、美麗な豊乳から股間までを露わにしている。清楚な白のショーツは淫らな液が染み込み、千切れたクロッチから女陰が濡れた陰毛を纏いさらけ出されていた。そして、スカートが無事なため、一見わからないが、寧とかんなも陵辱のとき、すでに下着を奪われている。
喜悦と忍耐の入り混じる複雑な表情で悩ましい呻きを堪える様子から、彼女らの剥き出しの女性器にも、布紐はギッチリと食い込んでいるに違いない。

「だ、だめぇ、真琴……ちゃん。う、動いちゃっ、くぅっ‼　こ、擦れ、て、変に、なっちゃ……はぐっ！」
小柄な分だけ食い込みがきつくなるのだろう、ツインテールの少女は寧の腰にしがみついて、目一杯爪先立ちし過剰な悦感を耐え続けていた。
「ご、ごめん……。こんなことに、なってる、なんて……。で、でも、二人とも、正気に戻ったん、だね」
爪先で身体を浮かせ、身動きせぬよう静かに話す。それでも自分で発した声のわずかな振動に、布地に密着した膣前庭の粘膜から熾火（おきび）のような熱が疼いてくる。
「正気、なのかな？　あいつ、い、十六夜の奴がいないから、なんとか気を、張ってられる……みたい」
三人のなかで一番長身。それだけに食い込みもいくらか穏やかなのだろう、寧が悔しげに答えた。
「でも、薬の、せいで、あ、あの目に、どうしても……逆らえなくなって……」
残酷なことに記憶は残っているらしい、十六夜の思うがままに操られ、繰り広げた行為が脳裏に浮かぶのだろう、寧とかんなは潤んだ瞳で悔しそうに俯いた。
「悦楽……ドラッグ、あの汚らわしい薬の所為……」
意識を失う寸前、おぞましい精液とともに喉へ注ぎ込まれた錠剤を思い出し、真琴は忌々しそうに呟いた。

自制心を揺るがせ邪悪な眼力に抗う力を奪った違法薬物。それがいま自分の身体をも蝕んでいる。
「生徒会長の奴、この薬使って、学園、牛耳ろうと、た、企んでやがる。……せ、生徒会組織の、権力、強めるため、わ、わたしら、悪者にしたてて……」
怒りに紅髪の娘の眉根が寄せられる。
「と、とにかくこれ、なんとかしなくちゃ……」
焦る心に、早く抜け出そうと真琴は花弁を押し開いて秘肉に食い込んだ飾り紐を、両手で掴み押し下げた。
「――だ、だめなの、真琴ちゃんっ！　くぁはあっ!!」
「んひぁあっ!!　いけないっ、真琴おっ！」
その行動を目にした途端、少女たちから悩ましい抗議が振り絞られる。
「え……!?　――ふっ！　はわぁああうっ!!」
可憐な桃色の薄い布紐。指先で簡単に千切れそうなそれは、体格のよい男の身体を宙吊りにしても、綻びすらしない特殊な繊維で織られている。城島かんなの武器は、真琴の体重をかけた両手の押し込みを強烈な反発力で押し返し、三人全員の敏感溝を抉り穿った。
（ど、どうしよう……ッ!?　股、がぁあぁ……）
さらに深々と陰部にめり込んだリボンに、背筋が硬直する。自ら側面へと倒れ込んで抜け出ることも考えたが、もしもタイミングを誤ったら、急激な動きの衝撃がそのまま秘部

に襲いかかる。悩ましく顔をしかめ、強靭なリボンの辱震に仕舞人たちが身をくねらせるなか、突然教室のドアが勢いよく開け放たれた。

「なんだよ、教室独占して変態プレイのお楽しみかよ？　仕舞人ってのは、ずいぶんと図々しいんだなぁ」

心を抉る罵声とともに、生徒たちがなだれ込んでくる。

「これってかんなのリボンじゃない。こんなの使って三人で仲良くオナニーって、ヤバ過ぎだわ……」

主にこのクラスで共に学んできた級友たちだが、他のクラスや学年の者までいる。

「ち、違う……これ、わたしらがやったんじゃ……」

窓枠と廊下側の壁に両端をしっかりと固定され、腰の高さでピンと張られたピンクのリボン。そこに自分たちを跨らせたのは、生徒会の者たちだと寧が告げようとする。

だがクラスメイトは誰一人耳を貸そうとせず、整然と並ぶ机を押し退け近寄ってきた。そして、三人の陰部に食い込む紐布へと手を伸ばす。

「――!!　だ、だめえっ！　これ触っちゃっ!!」

男女問わず幾本もの指が面白半分に、強度を高めた弾力度抜群のリボンを弾く。

「ひへあぁ――っ！　こ、こんな……なんで、身体ぁっ変ッ!!　あぐぅう、くぁあっ！」

「んふぁあっ！　真琴ぉ、そ、そんな、しがみつい、ちゃ……くぁあああぁああっ!!」

「ひあっ!!　かんな……のリボ、ンッなのにぃっ！　だめなのおっ!!　ふぁわわぁあっ！」

特殊素材の大きな振幅に布紐が陰唇を出たり入ったりを繰り返す。蜜液にふやけて感度を増した薄花弁を何度もめくり返され、股がぐずぐずに緩んでしまう。
「あ〜あ、あんな顔だらしなくさせて喜んじゃって……どうしようもない淫乱だな、仕舞人ってのはっ!!」
互いを支え合う手に力を込めて少女たちは肌を震わせた。
「――まったく、困ったものだよ。もっと早く彼女たちの本性に気づいていれば……」
紐布の快楽で朦朧となる意識に、十六夜鏡也の芝居がかった口調が飛び込んできた。
「い……いざ、よ、いっ！　貴様ぁ、よ、よくもっ!!」
声を震わせ、凄まじい形相で睨みつける少女を、総毛立つような笑みが迎え撃つ。
(くうっ!!　み、魅眼ッ！)
強い意志を持つ通常の真琴ならば、心惑わす眼力にも屈しなかっただろう。だが、精液とともに飲み込まされた悦楽ドラッグが自制心を蝕んでいた。
(え……なに、こ、これ……っ!?)
憎しみと怒りしか感じぬ邪悪な敵なのに、見つめているだけで胸がときめいてしまう。頭の奥で警報が鳴り響く。慌てて目を背けようとした途端――。
――じゅわんっ！
「ふわぁあぁっ!?」
下腹の内側で膨らんだ熱が、一気に狭穴を通って溢れ出て腿の内側を流れ下ってゆく。

ハッとなって辺りの様子を窺うと、同級生たちの呆れ顔がその漏れ汁に注がれていた。
「こ、これは……ち、違……」
十六夜の魅眼に見つめられて欲しくなってしまったなどと、口が裂けても言えない。
「愛液だらだら漏らして、イヤらしいなぁっ!!」
「三人揃って、ま○こびちょびちょにして……なにが仕舞人だよ、この変態女……」
情けなさで胸が張り裂けそうだった。寧とかんなも膣から大量の愛液がこぼれ出てしまい、クラスメイトの罵声を浴びて屈辱に震えている。
「悦楽ドラッグ……危険な違法薬物を乱用して遊んだ結果がこのざまか……。正義の味方ぶりながら他の生徒たちにまでこんなものを流通させようとしていたなんて、恐ろしい人たちだな、君らはっ！」
大仰な身振りで、生徒会長が糾弾する。
「なに、いって……お前、が……みんなに……」
生徒たちの前でまたしても罪をなすりつけようとする卑怯者に、上擦る声で言い返そうとする。だが怒りの余り身を乗り出した動きで布地が花弁の内側を滑る。
「ひうぁあぁぁっ！　お、おのれぇっ!!」
「くわふぁあぁぁっ!!　らめなのぉおぉっ！」
「ぬうぅうぅぁあぁっ！　ま、真こっ、やめぇっ!!」
一本のリボンを全員の股間に食い込ませているため、真琴の動きは同じ刺激を二人にま

でもたらす。
「やはぁあああっ!!　な、なんで、動くのぉ、ま、真琴ちゃんんっ！」
一番食い込みがキツイかんなが、たまらず悲鳴を上げ可愛らしい尻を左右に蠢かす。
「ふぁああっ!!　かんな、あんたまで、う、うご、動いたら……っ！　だめっ、あ、ああぁあっ!!」
脇腹にしがみつかれながら真後ろで激しく動かれ、寧は真ん前から来る真琴からの刺激に挟み込まれた。
「ひはぁあっ!!　寧ッ、それやぁあっ、ばかあっ！」
「ふぁっ!!　はっ、くっ、ぁあああっ！　寧ちゃん、だ、だめぇ、んひぁあああぁっ!!」
伸び上がりクネクネと尻を捏ねる長身少女の悦動に、反撃を食らった真琴とかんなから非難混じりの嬌声が跳ね上がった。
（く……あぁ、だめ、う、動いちゃ……）
「ん……く……ふぁ……やだ……ッ」
このまま喜悦に身体を任せたら、なし崩しに快楽の地獄へと陥ってしまう。秘唇を内側から刮げられる美感を堪え、真琴と寧は捩れる身を抑えようとした。
「ふぁあ、や、やあっ！　へ、へん……変、なっちゃ……ふぁはぁあああっ！」
だが、かんなだけが尻をクネクネと捏ね回し、食い込み紐を揺さぶり続ける。
「だめえっ！　かんな、だめ、我慢してよおっ!!」

「そ……そんな、動いちゃッ……!!　やめ……てぇ、かんなぁ、ぁあああぁ……ッ！」

動きを堪えたことが余計に刺激を強く感じさせていた。一人快楽に悶える少女へと、非難を浴びせてしまう。

「だ、だってぇ……んくふっ!!　か、かんなちっちゃいからぁっ、た、たくさん……食い込んじゃって、すごい、か、感じちゃうん……だもんっ！　ま、真琴……ちゃんも、寧ちゃん……も、背ぇ、お、おっきい、からあぁっ!!　ふぁあぁっ！　楽、なのにいっ!!　か、かんな、大変なのにっ、ずるいよぉっ！　はぁぁあわわあっ!!」

我慢しようと頑張っているのに、小柄な身体がどうにもならない。

「おいおい、オナニーしながら仲間割れかよ!?」

股をくねらせながら罵りあう仕舞人たちに、ドッと笑いが起こる。呆れたように囃し立てられ、真琴たちは情けなさに唇を噛み顔を伏せた。

「そんなリボン遊びより、ぶっといの挿れたくなっちまったんだろ？」

彼女たちの痴態に欲情した男子生徒が、もっこり隆起した股間をこれ見よがしに突き出してからかった。

「だ、誰が……そんなものをっ！」

不機嫌な口調で拒むが、視線が膨らみに引き寄せられてしまう。意識から追い出そうとしているのに、ジッパーを固く閉ざしたズボンの内側が気になる。

「ずいぶんと熱い視線を男の股間に注ぐね、剣崎くん。でも、君が挿入したいのは、これ

じゃないのかな？」
十六夜の声に我に返り、慌てて彼のほうを振り向く。
「す、鈴斬……」
その手に握られたものに、赤みがかった髪の少女は言葉を詰まらせた。
「いままでは黙認されていたようだけれど、これって本物の日本刀……ようするに凶器だよね。こんなものを学園に持ち込むというのは、どうかと思うのだが？」
確かに教師に許可を得ず、肌身離さず携帯していた。しかし普段はきちんと布袋に収め、鞘すら見せぬよう気をつけていたのだ。抜くときは人目のない放課後、悪を打ち倒すときのみ。そう告げようとしたときだった。
「――しかも生徒会室に押しかけて、運動部員に怪我を負わせたとなると、見逃すわけにはいかないなあ」
「ぐっ……そ、それは……」
仲間を掠われた憤りから、短絡的な行動に走ってしまった。己の愚かさが身に染みる。
「いくら格闘部系の猛者相手でも、真剣はやべえよな」
「俺、見てたけど、すげえ一方的だったぜ。生徒会室警護してた連中に、ありゃないよな～」
生徒会室前での派手な大立ち回りは目撃者も多く、怒りに任せたその戦いぶりは、彼らを恐怖させるのに十分であった。十六夜による暗示も手伝い、取り囲む者たちは口々に真

琴たちへ、不審の罵声を浴びる。
「しかも、君たちは押し入った生徒会室で、この刀を使って変態的な行いで僕を誘惑しようとしたね」
十六夜に抜き放たれる白刃と鞘との間に、ねっとりとした糸が幾筋も引かれる。
「うわ、なんだありゃ⁉　なんかあの刀濡れてない？」
切っ先を仕舞人たちに向け無造作に構える、峰に刃を拵えた逆刃刀は、濃厚な透明液に全体を覆われ、ぽたぽたと重い滴を床に落とす。
「まったく君たちの淫らな体液のせいで、服が汚れてしまったよ」
飛び散った滴を制服に染みさせ鏡也が苦笑する。その言葉に生徒たちの呆れたどよめきが湧き起こった。
「た、体液って、じゃあ、あれ、マ〇コ汁かよっ⁉」
「うへぇっ、刀使ってオナニーしてたのか、正真正銘の変態だな、こいつらっ！」
少女たちの顔が一瞬にして真っ赤に染まった。
「ち、違う、それは……」
挿入された柄の感触が膣穴に蘇ってしまう。
「なにが違うんだい？　剣崎くん。この刀が気持ちよくてたまらないんだろう⁉」
わずかな沈黙を破り、酷薄な笑みを浮かべる少年は、刃の先をおもむろに突き出した。
「――ひぁあっ‼」

ぷにん、と乳房が小突かれ揺れ跳ねる。くすぐったいような脈打つ刺激に、思わず真琴は上擦った悲鳴をこぼして身を震わせた。途端に陰部がリボンと擦れ、仲間たちを道連れの腰が萎えそうな悦感に身悶える。

「く……あぁぁっ!! や、やめ……やめろおっ！」

冷たい鋼が肌を嬲る。切り裂かれた制服の下からこぼれる豊乳に切っ先を埋め込まれたまま捏ね回され、むず痒さが蓄積してゆく。そのたわわな膨らみを覆っていた布地は細かく千切られ、肉肌を擽り悦感を煽る。

（また……鈴斬で、こん……な、こと……をっ!!）

刃のない刀身の腹を大胆に押しつけながら、屹立した乳首を弾き右から左の房へと責め所を変える。

「はふっ!? ひゃわっ、ふっ、はくぅううっ！」

べっとりとこびりついた愛液を、上気した少女の肌から滲み出た汗に混じり合わせ、じゅっぷ、ぐじゅぷ、と悩ましい液音を鳴らす。意識が飛びそうな衝撃に全身が震え、穴奥からじゅわんと熱い滴が溢れてしまう。

「やぁ、ま、真琴ぉ、そ、そんな動いちゃ……」

「んぁあ、だめぇ、お股、危なくなっちゃ……ふぁ！」

爪先立ちでも密着している高さのため、跨いで越すのも容易ではない。

リボンに股間を刺激され悩ましく喘ぐ少女たち。特に、もっとも小柄で食い込みがきつ

いかんなに、生徒たちの好奇が集中した。

「城島さん、ほんとリボンが好きだね。もっとたっぷりくわえさせてあげるよ」

粘り着く視線で小柄な身体を舐め回しかんなを取り囲んでいた男たちが、猫撫で声で言った。

「ひ……？　あ……!!　だ、だめっ、ふはぁあっ！」

潤んだ瞳にリボンへと伸ばされた彼らの手が映り、少女は大慌てで拒む。だが遅い。

――ブズズッ!!

前後から思い切り引き上げられたリボンが、一層細く縒れて股に食い込む。

「きぃひっ!?　――っ、ぁあぁあぁ――――ッ！」

繊細な箇所をこれ以上ないほど圧迫され、壮絶な波動に絶え間なく痙攣する。

「い、ゃぁあぁ……もう、だめぇ……おかしく、なっちゃ……ふぁわぁあぁあぁあぁっ!!」

爪先立ちでもまったく緩まぬほど食い込んだ紐布は、肛門から恥骨までぴっちりと密着し、前後へと揺さぶる動きで敏感な粘膜部をヤスリのように摩擦する。

「ひっ……ふあっ、あわぁああっ！　んいぃいっ!!」

陰唇花弁の内側がめくり返され、メチャメチャに掻き回された。包皮をズリ降ろされたクリトリスが、圧迫とともに捏ね転がされ火花が視界に弾ける。

「や――――ッ、あぁっ、ら……めぇッ!!　も、もうっ！　ふ、ふぁああわぁあっ!!」

下腹の内側からなにかが膨張する感触に、壮絶な痙攣がかんなの小柄な身体を襲う。
――ぷっ、しゃぁあぁ――――――ッ！　じょぼっ、ジャブブッ!!　ジュバババァァアアァアアアッ！
咄嗟に両膝を交差させ窄めた股間から、夥しい量の小水が噴射された。アンモニアの芳香と絡み合った色濃い淫臭の湯気を生暖かく立ちのぼらせる。
「ひゃわぁあっ!!　やぁあぁっ、やらぁあぁっ！」
失禁と絶頂に意識を打ちのめされ、かんなは牡たちの手の中に崩れてゆく。その刹那、十六夜の振るう鈴斬の刃が彼女たちを苦しめていたリボンを切断した。
「くふぁっ!!」「あうっ！」「はひぃっ!!」
股間の激烈な感触が急に失せ、少女たちがバランスを崩してへたり込む。
「リボン遊び、楽しんでくれたようだね、城島くん。だが、君たちはこれくらいじゃ満足できないかな？」
悦縛から解放された虚脱に浸り、乱れる息を落ち着かせていた真琴と寧に、情感の乏しい声が降り注ぐ。
「くっ!!　十六夜、貴様っ！」
怒りの眼差しで睨みつける。その二人の首筋に、チクリと痛痒い刺激が潜り込んできた。途端に重苦しい切迫感が下腹の奥で膨れあがる。

「くぁっ、利尿のツボ……ッ！　修二、よくもっ‼」
生徒会長と並んで立つ酷薄そうな少年を睨みつけ、寧が唸りとともに叫ぶ。その身体を強烈な尿意が襲う。傍らでは真琴も身を強張らせ、もじもじと尻だけを震わせ耐えている。
「我慢は身体によくないぜぇ。なんなら俺が手伝ってやろうか？」
軽薄な声を垂れ流す元カレに背後から抱きかかえられ、寧の顔が蒼白になった。
「――くぁっ、や、やめ……ろおっ‼　触るなっ！」
自分で身体を支えようと脚に力を込めれば、その力みで漏らしてしまいそうだ。
「おいおい、いまさら照れる間柄でもないだろう？　こんなとこ硬くして、感じまくってるくせにっ‼」
後ろから摺り寄せてくる男の頬に、怖気を震い顔を背ける。その様子を都合良く曲解して、修二は俺のものとばかりに豊満な乳球を両手で無造作に揉み嬲る。
「ふぁうっ、は、放せっ、馬鹿っ‼　いひうっ！」
大きく広げた指にも収まりきらぬ柔肉が揺れ拉げる。ブラウスを押し上げた乳首粒を指先に摘まれると、モデルのような痩身がビクビクと跳ねた。
「なんだよ、こっちも楽しそうなことしてんじゃん」
男ばかりか女生徒にまで敏感箇所を弄ばれ悶えているかんな。その小柄な性玩具に飽きた者たちが、わらわらと集まってきた。
「うへへ、ビデオで見たよりもエロい乳してんな。触り心地よさそうだぜっ！」

元恋人に抱きすくめられ、妖艶にもがく少女の肌に無数の腕が殺到する。
「あぐうっ！　さ、触るなぁあっ!!　あ、ああっ、もおっ、そんな、したらぁあぁ……」
もう尿意が限界に達しているのに、歓喜の甘汗を吸い込んだ制服を乱暴に乱し、白肌に指先が食い込む。
「ここもすげえビショビショだぜ。あんなリボン挟んでいたら当然か!!」
スカートをめくり上げられ、ショーツを穿いていない股間をさらけ出される。
「はわっ⁉　い、いやああっ!!　そこだめえっ！　ひぃうううぅ……」
陰部を露わにされた恥ずかしさと迫り来る指への恐怖に、身を捩って悲鳴を上げる。
「俺とヤッてたときは、チンポ好きぃいいっ！　とか、お尻もっと穿ってぇえぇっ!!　とか、嬉しそうにわめいていたくせに。本当はいまも気持ちいいんだろう？」
過去の痴態を、かつての恋人に大声で暴露された。
「――そんな、話……やめ、くっ、ぁああっ!!」
クラスメイトたちの好奇と軽蔑に満ちた眼差しが肌に染み入り、桃色髪の娘は顔を恥ずかしげに染め俯く。
「アンニュイな美少女のイメージぶち壊れじゃん！」
「黄昏(たそが)れたふりして、本当はおま〇こびちょびちょで、男物色してたのかっ⁉」
秘められた本性を暴き出そうと、男たちの愛撫がいやらしさを増した。濃厚な蜜が滲み出る股花弁を押し広げ、幾本もの指が女陰を掻き乱す。

「かはぁあっ！　でちゃ……でちゃうからぁあっ‼　も、もうっ、漏れちゃ……漏れるぅうぅぅっ！」
脳裏を打ちつける快感に、助けを求めて漂わせた眼差しが修二へと惹きつけられた。
「このさい、俺と一緒になにやってたか懺悔しちまえよ。みんな同情してくれるかもしれないぜ‼」
「僕も知りたいなぁ、緒方のことを」
意識を過去へと引き戻す修二の命令とともに、十六夜の魅眼が覗き込む。途端に、喜悦の弾けた少女は嬌声に乗せて大声で叫んでいた。
「――あ……しゅ、修二のちんこよかったぁあぁっ！　太いの、奥まで来てっ、はあぁあっ‼　弱い奴、カツアゲして、気持ちいい薬買って……ふぁふぅんっ、あ、あはぁあっ、くふぅうぅうぅぅん！」
脳裏に浮かぶ忌まわしい思い出をそのままに告白し、寧は腰を激しく痙攣させた。
「こいつ、とんでもない牝鬼だなっ！　人に迷惑かけたの思い出して悶えているぞっ⁉」
べぶじゅっ‼　と、感極まった奥壺から熱い迸りが噴き出て男たちの手をべっとりと濡らす。
（ひぅぅぅっ‼　――あう、わ、わたし、なにをっ⁉　ああ、知られちゃったっ、み、みんなに……真琴にも、かんなにもっ‼）
魅眼に頭を真っ白に染められ、とんでもないことを口走ってしまった。羞恥に染まった

顔が青ざめる。もちろん男たちの愛撫はやむはずもなく、弄くられる股間で尿意が爆発的に膨らんでしまった。

（ね、寧……ああっ、あんなとこ、を……はうっ!!）

息がかかるほどの目前で、親友の大切な箇所が男たちに弄ばれていた。悲痛な光景だというのに、興奮が膨れあがる。十六夜の手が、胡座の中へと背後から抱き込み、その情欲を煽るように真琴の乳房を揉み遊ぶ。

「く、ふぁ……ね、寧……。――はうっ、なにっ!?」

弾力に満ちた霊峰はどれほど拉げられても張りのよい艶肌を震わせて、ツンと紅色の小粒を上向かせた美形を取り戻し、真琴の意識を浮遊させる。慌てて振り払おうと、十六夜の手首を掴んだそのとき――。

「あぁっ!!　あはあっ、でっ！　でちゃ……ぁはっ!!」

唇を噛みしめ悦感に耐えていた寧が、弾けるように悲鳴を張り上げた。大きく全身を痙攣させると、萎えた脚を突っ張り、淡い陰毛に彩られた土手高の恥丘を真琴の鼻先にまで迫り出す。甘酸っぱい牝の淫臭が強く匂う女裂に小さく開いた穴が拡張した。

「やあぁっ！　漏っちゃふっ!!　かっはぁ――っ！」

――ぷっじゃぁあああぁっ!!　ぼじゃじゃじゃじゃじゃぁっ！　べじゃぶじょぼぼぼぼぼぁあぁっ!!

熱い飛沫が勢いよく真琴の顔面を打った。
「ふぁぷううっ‼　ね、寧ひぃいっ！」
刺激的な香りと苦しょっぱい味が口中に広がり、脳裏を痺れさせた。陰唇襞を震わせ辺り一面飛び散りながら、太い直撃を親友に浴びせる壮絶な失禁。
開放的に緩んだ歓喜と、罪悪感が入り混じった表情を強張らせ、寧の顔から血の気が引いてゆく。
「あひぃいっ！　だめぇっ、だめなのにいっ‼　ごめん、真琴おっ！　はぁううっ、やだあ、止まらないっ。おしっこ止まらないよおっ‼　ああん、だ、だめっ‼」
最後の一滴まで勢いを緩めることができず小便を真琴にぶちまけ、寧は放尿の快楽に意識を弾けさせた。
「ふぁあぁ……ね、寧ィッ‼　寧のおしっこぉ……」
濃厚な匂いに満ちた黄金水を浴びせられたというのに、羨ましさを感じてしまう。
（あ、あたしも、おしっこしたいぃ……ふぁ……あそこがっ、ジンジン痺れて……も、もう……っ‼）
理性の堰が緩み、快楽を受け入れようとしたとき、崩れてゆく寧へと情欲に狂った牡たちが殺到する。
「気持ちよすぎて仲間に小便顔射かっ！　変態趣味もここまでくるとスゲエなっ‼」
彼らとともに修二が蔑みの言葉をぶつけながら、痩身を押し倒す。興奮に先走った液を

輝かせる肉勃起を、強引にこじ開けた寧の陰部へ乱暴に押し込んだ。
ぬぶぅぶぶぶぅぶっ！
「――くふぁぁっ!?　はぁひぃいいいいっ!!　い、イイッ！　太いのぉ、奥ぅ、きたぁはぁあああぁんっ!!」
十分過ぎるほど濡れ緩んだ膣は、はち切れんばかりの極太を易々と根本まで呑み込んだ。
ずびゅっ!!　ぐじゃばっ！　ぶずんっ!!　ぬばっ！
「ふぁあっ！　そっ……も、もっとおっ!!　んふぁっ！　だめ、止め……ああ、すごいッ――くっぁあっ!!」
最初から飛ばしまくるストロークに、奥壺から白濁気味の滴を噴きこぼす。
「ね、ねいっ!!　……んくはぁあっ！」
その様に、真琴は屈しかけた意志を踏み止めた。
「また、イッちゃ……ひはっ！　かんなぁ、いっちゃふのぉっ……ひゃぁあはぁあっ!!」
甲高い悲鳴に振り返ると、かんなが大きく開脚させられた姿勢で抱え上げられ、前後から極太い肉竿を突き込まれていた。リズムを合わせて二穴の奥をかち上げられる快楽に、正気を失った瞳を漂わせる。その周りに群がる生徒たちが自ら衣服を乱し、男根や乳房を柔らかな肌に押しつけ、狂おしい愛撫に耽っていた。
「お……まえたちっ!!　二人から……離れろっ！」
もう膀胱が限界だった。太い疼きが脈打つたびに、下腹を痛みが跳ね上がる。それでも

真琴は括約筋を必死に引き締めながら仲間を気遣った。
「こんな状況だというのに彼女たちの心配とは。まったく君は我慢強いな……感服したよ」
耳朶に唇を触れさせ低く囁くその声に、感度を増した肉体が心地よさを感じる。
「な、なにを……ふざけたこと……を……」
歓喜に肌を震わせながら、態度を和らげた敵を訝しむ。乳房を包む十六夜の両手は未だに濃厚な愛撫で柔房を揉み拉げ、真琴の理性を揺るがし続けている。
「正義を気取る愚か者と思っていたが、君の心の強さは賞賛に値する。どうだい剣崎真琴くん。副生徒会長となってこの僕のために働いてはくれないか？」
褒められても少しも嬉しくない。邪悪な男の誘いに虫酸が走るのだが、肉体を心地よい疼きが惑わす。
「君の流儀とは異なるが、僕は僕なりにこの学園に秩序をもたらそうとしている。愚劣な輩が好き勝手に振る舞う現状は、非常に不愉快なのでね」
だから薬物で生徒の自我を奪い、悦楽によって統制しようというのか？
「そんな、くふぁッ……け、計画に、誰が……手を貸すもんかはぁんっ！」
拒絶の言葉を紡ぎ出す声が、まるで愛撫をねだるように上擦ってしまう。
「残念だなぁ。――もっと気持ちよくさせてあげれば、考えを変えてくれるのかな？」
初めから拒否されるのを待ちかまえていたように、空々しい言葉が耳朶を甘く擽る。その唇を首筋に這わせ、ねっとりと舌で肌をしゃぶった。

「――ひうぁあっ⁉　や、やぁあぁっ！」
脳裏を嫌悪が占める。それなのに心ときめく悦楽がゾクゾクと背筋を震わせた。
（くぁ、も、漏れ……ちゃ……）
じわん、と尿道が熱く染まり、数滴の滴がこぼれてしまった。このまま一気にぶちまけてしまいそうな危機に、呼吸を止めて腰を突っぱねる。
（だめっ！　おしっこだめ漏れちゃうっやだあっくっふぁっ、んく――はぁああっ‼）
膀胱の疼痛が激しさを増し、重い脈打ちで下腹を苦しめた。それを気力で抑えつけ、歯を食いしばる。――堪えきった。そう思った瞬間。
「そういえば、お尻に挿れてあげたとき、嬉しそうだったね。また喜んでくれるかな？」
「えっ‼　なに……⁉　――まさかっ、だめえっ！」
不意打ちの問いかけに心臓が跳ねた。十六夜の右手が乳房から離れ、尻の熟れ房を押し分け下がりくる。
腰を浮かし逃げようと試みる動作が、迫るものへと尻を差し出してしまった。男の中指は妨げられることなく弾力に満ちた双房を押し開き、菊門をこじ開ける。
「ひゃふぁっ‼　や、やぁ――っ、そん、なぁあっ！　くっはぅううぅぁあぁんっ‼」
膣穴から後ろにまで溢れていた愛液が、十分過ぎる潤滑をもたらす。息を詰まらせる灼熱がミシミシと粘膜を震わせ突き込んできた。
（ひぁあぁ……そ、そんなぁ……お、お尻ぃ、お尻がぁああっ‼　ん……くぅあはっ！）

一度歓喜を教え込まれた直腸に嬉しい感触が湧き上がった。わくわくと勝手に襞壁が蠢動し、硬い異物感を味わおうと活発な行動を繰り広げる。

「すごいな。早速締めつけてきたよ。くっ……そんなに、食いつかれたら、指が痛くなってしまう！」

その期待に応え十六夜は指先を鉤状に折り曲げ、絡みつく襞肉を掻きほぐす。

「――あふぅうっ！　だ、だめっ、動かしちゃっ!!　きひぃっ！　イヤァアッ、強いィイイイイッ!!」

最初から手加減なしの強引な抉りに目がくらむ。

――ぶじゅっ！　げちゅあっ!!　じゅぶずぶっ！

うねる粘膜に菊門から吸い込まれた空気が入り混じり、染み液を掻き回す異音が尻から放たれた。

（ああっ！　なんで……？　どうしてぇえっ!?）

尻の穴に他人の指が入ってくるなど、昨日までなら想像しただけで顔をしかめてしまうような汚らわしい行為だったのに……気持ちよくて仕方がない。

「もう……だ、だめぇっ！　わはぁああっ!!」

掠れゆく理性を集中させ、必死で耐えている限界を超えた尿意。その脈打つごとに鈍痛を弾けさせる苦しさが、尻穴からの甘い波動に決壊した。

――ぴびゅ、じょびょじゃばぁあああっ！　じょどっ、ばどどどどばじゅばばじゃばば

ばぁあああぁっ‼

十六夜に抱きかかえられ大きく開いた股ぐらから、飴色の激流が噴き上がる。その直中に十六夜の手が鈴斬を突き出し、激しい飛沫に刀身を直撃させた。

「だめぇっ！　そんなっ、おしっこっ、止まらないいっ‼　鈴斬濡れちゃうっ！　汚いおしっこ、かかっちゃうッ‼　おしっこだめなのおおおっ！」

針によって異常に激化させられた尿意は、もはや理性では制御しきれず、荒ぶる奔流を放ち続ける。

「あ〜あ、大事な刀だって言ってなかったっけ？」

「それにしても、並の量じゃないわねっ‼　人前でこんないっぱいおしっこして、恥ずかしくないの⁉」

寧とかんなを犯しながら、クラスメイトたちが真琴の収まらぬ失禁を指さし笑う。

「あふうっ、真琴ちゃんッ、いっぱい、出してる‼」

「ふぁぁ、そ、そんな、たくさん、漏らして……んくぅ、ま、真琴の、熱いいっ！」

その飛沫を浴びて仲間たちが緩んだ嬌声を垂れ流す。

（お祖父様にいただいた大切な剣を、ああっ‼）

恥辱のなかで神刀を汚してしまった罪悪感に苛まれる。その心を抉る言葉が、酷薄に微笑む唇から放たれた。

「この刀は君の誇りそのものなのだろう？　剣崎くん。それなのに、尿を浴びせて汚すと

は……。――この刀を疎んでいると……捨てると取っていいのだね？」
「――⁉　ひぃっ！　あ……っ‼　ち、ちが……」
少年の詰りに怯え、ただおろおろと首を振る。
「ならば、この可哀想な逆刃刀は、僕が拾ってあげることにしよう」
まるで元の持ち主の虐待から救うように、鏡也は少女の尿で濡れた刀身を引き寄せる。
（あぁあ……だめぇ……そんなぁっ！）
返せと拒む声を出すことができない。
刀身を滴り落ちる臭い小便は自分が漏らしたものなのだ。
全身が脱力するとともに、剣を失った少女は気力までも抜け落ち、放心していた。
なにも考えたくない。
絶望感から逃避するその呆けた顔を、強い腕が無理矢理に振り向かせる。
「痛ッ……ひっ……‼　――あ、あぁ……⁉」
頤（おとがい）を乱暴に掴まれ、首を限界まで捻られる痛みに呻きを漏らす。その虚ろな瞳へ、邪悪な視線が流れ込む。異様な輝きの虹彩。決して瞬かぬ、毒蛇の眼差し。
「しかしずいぶんとぶちまけてくれたものだね。おかげで僕の鈴斬も、こんな有様だ」
早速、所有を誇示しながら魅眼の主は、奪った刃をねじ曲げた少女の頬に押し当てた。
鋼の冷たさに息を呑む。不浄な滴が血の気の引いた肌を濡らす。不快な刺激臭が鼻孔を満たし、こんなもので剣を汚したのだという罪悪感に追い打ちをかけた。

「くっ……ううっ……」
嗚咽とともに、溢れくる涙が視界をぼやけさせた。魔の眼力は、望みを失いズキズキと痛む心を甘く誘う。
「こんな畏れ多いことをしたからには、償わなければいけない。どうすればいいのか、わかるね？」
十六夜の眼力が心を侵してゆく。自我を奪われるおぞましい行為なのに、胸が痛み続けるいまはそれを受け入れることが心地よい。
「さあ、跪き、這いつくばり、鈴斬の許しを請えっ‼」
「――は、い……」
乾いた声で呟き、のろのろと身を起こす。浮かせた尻から、根本まで挿入されていた鏡也の指が菊皺を、ちゅぽん、と小気味よく響かせ抜け出る。
「ひあっ……ィッ！」
その衝撃に一瞬全身を崩しかけ、喘ぎを震わせる。だがすぐに体勢を立て直すと、真琴は生徒会長の胡座から抜け出し、自分が放った小便で大きな水溜まりのできた床へ両手をついて這いつくばった。
「ケツの穴弄られて喜びながら土下座かよ？　ずいぶんとふざけた剣士さまだなっ！」
「反省の色が全然みえねえぞっ！　どうやらお仕置きが必要みたいだなっ‼」
菊門を痺れさせる快感の余韻に身を震わせ頭を垂れる少女に、野太い罵声が降り注ぐ。

驚き顔を上げるとそこには、生徒会室前で彼女に叩きのめされた格闘系部員の猛者たちが、木刀を片手に勢揃いしていた。

「お、お前たち……!!　くうっ、な、なにをっ!?」

彼らの痣だらけの顔を愕然と見回すなか、濁液にまみれた赤い髪を掴まれ引き起こされる。苦痛に呻きながら真琴は蹲踞のような股を大きく開いた中腰の姿勢を強いられていた。

「剣士たるもの剣への礼節を忘れてはいかんな。それもわからん貴様が鈴斬を使うなど勿体ない。まずはこの使い古した木刀で、剣の尊さを教え込んでやろう」

黒い汗染みとささくれが立つ薄汚い切っ先を突きつけ、剣道部主将が告げた。その刀身は刺激臭を放つ滴に濡れ、濃厚な白濁の液塊をこびりつかせている。

「てめえのションベンだけじゃなく、俺たちのスペルマもたっぷり振りかけておいたぜ。じっくりあじわいなっ!!」

「へぁああ、だ、だめぇえっ!!　ひぃいぅううっ！」

禍々しい汚汁に戦慄する。だが一斉に突き出された刀身に肌を捏ねられた途端、必死の叫びが悩ましく媚びてしまった。蕩けるようなぬめりが硬い木の感触を乗せて、肉の内側にまで疼きをもたらす。

こぼれ弾む豊かな乳球に幾本もの切っ先が食い込み、美房を拉げて掻き回した。

「はわぅっ、ぁああぁっ！　お、お乳ぃイイィっ!!」

有無をいわせず脳裏を染める快感が湧きだす。目の前に差し出された木刀をそれぞれの

手で握りしめ、真琴は身体を支えながら物欲しげに腰をクネクネと振りたくった。
「ふん、淫乱女め。木刀で少し弄ってやっただけで、そのざまかっ⁉」
「おま○こもケツ穴も見せまくっちゃって。挿れて欲しくて仕方がないようだねっ！」
手のひらに粘る精液木刀の感触が心臓をドキドキさせる。小便と入り混じった脱力的な発酵臭に気が遠くなりそうだ。男たちの罵りにこくり、と頷いてしまい、慌てて我に返る。
「――ち、違うっ！　あたしっ‼」
その様に教室中から笑い声が上がった。自分の取ったはしたない行動に顔が真っ赤に染まる。だがその取り繕う姿を暴くように、べびゅぶっ！　と音を立てて膣穴から愛液の飛沫が噴き出し、陰唇花弁と菊皺が痙攣してしまう。
（ひゃうっ、な、なんで……？　お腹がぁ熱いっ！）
「ま○こから涎こぼすほど飢えてんのかっ⁉　仕様がねえ牝だな……ほらよっ！　たっぷりくわえなっ‼」
抑えきれぬ悦欲にうろたえる真琴のヴァギナとアナルへ、太腿を擦っていた切っ先が突き込まれる。
「――‼　あっくぁあああっ！　はあぁ挿入るうっ‼　挿入ってきちゃっ、んふぁあああぁあんっ！」
ゴリゴリと腹腔を響かせ、木刀が膣穴と直腸に潜り込んできた。男根の弾力的な硬さとも、鈴斬の鞘の滑らかな太さとも違う、粗野な木肌に粘膜を刮げられる。軽く反り返った

切っ先に狭管を拉げられ、奥底を跳ね上げられると、意識が閃光とともに激しく点滅した。
「へぁああっ！　だめぇ、飛んじゃ……変になっちゃう!!　ふぁっ、あふぅああっ！　奥だめなのっ!!」
歓喜がゾワゾワと全身に波打つ。大股開きで級友へと見せつけた前後穴に極太をくわえ込んで、膣口と肛門がくちゅくちゅと蠢き濃密な液汁を垂れこぼす。
「だらしないツラしちまって、まだもの足りなさそうだぜっ！　本物のチンポぶち込んでもらいたいのか!?」
アナルを捏ね穿りながら問いかけられ、真琴は上目遣いに媚びた眼差しを向けた。
（ふぁ……？　お、おちんちん……太くて、気持ちいいの……欲しい……）
混濁した意識が肉壺から滲み出る欲求に惑わされる。だらしなく涎を垂らし桜色の唇を、呆けたようにぽかんと開く。
「チンコ挿れて欲しけりゃ、気合い入れて奉仕しろやっ！」
その無防備な口中に、精液と自分自身の尿にまみれた刀先がねじ込まれた。
「――むぐぐぁあっ！　ふぁっ、ふぉれぇっ!!」
肉勃起のように優しくない硬さが頬を内側から刮げる。ぽっくりとほっぺたを突起形に膨らませて、真琴は喉を蠢かせた。吐き出してしまいたいのに、木肌に染み込む苦酸っぱい汁味に魅了されてしまう。正気だったら一秒たりとも耐えられないであろう、生臭く濃厚なその淫味を求めて舌が切っ先を舐め回す。

（あぁ……変な、味、なのにぃ……止まらないよぉ）
男根をしゃぶるようにちゅぱちゅぱと音を立てて、誇り高き剣士は不浄な木刀に自分から唇奉仕を行ってしまっていた。
「君も少しは刀の尊さがわかってきたみたいだね。そろそろご褒美をあげようか」
ヌルヌルと口中にへばりつき味蕾を痺れさせる味わいに朦朧となるなか、十六夜が囁く。その途端、くちゅくちゅと前後穴を捏ね穿っていた木刀の動きが激しさを増した。太い刀身で襞を抉り返され、内臓が溶け崩れそうに灼熱する。
「くぅうぁあぁっ!!　やっ、やぁあぁっ！　ふぉんな、乱暴ぉ、しひゃぁあっ!!」
捻りながら前後の穴を交互に抽送され、激感に息が詰まる。大きく広げた脚を痙攣させながら真琴は絞り出すような悲鳴を上げた。途端に口中へとねじ込まれていた木刀を奥まで押し入れられ、苦しさに涙が溢れる。しかし木肌に染み込んだ精液の苦味を舌が刮げ取り飲み下そうとしてしまう。
「ケッ、散々俺たちのこと刀でぶちのめしといて乱暴は止めろだぁ？　気持ちよさそうなツラしやがって、説得力ねえんだよっ！」
少女に打ちのめされた傷跡へ忌々しそうに指を這わせながら、鍛えた体躯の男たちが気を昂ぶらせた。それぞれ手にした木剣の先で、彼女の乳房を小突き回す。
「――はわぁっ！　ふぉんな突いちゃっ!!　あっ、はぁうっ！　ツハァアアッ!!」
美房を拉げて埋まり込んでくる尖った切っ先に、柔らかな乳肉が絡みつき、意識を惑わ

す快感を生み出してしまう。
（だ、だめっ……これ、変に、なるぅ……っ！　木刀、だめぇ……）
精液と尿の香りに満ちた木刀に掴まり不安定な蹲踞（そんきょ）の姿勢を支える。手の中にある太い感触が、まるで男の性器を握りしめているような錯覚をもたらす。
子宮が急かすように脈打ち、熱い漏液が膣管を下り落ちる。負けじと菊穴からもねっとりとした分泌汁がこぼれ、ぶちゅ、ぐちょ、と淫靡な響きを絡め合う。
「やっぱり刀が大好きなんだなっ！　イヤらしい汁、だらだら垂れ流しやがってっ!!」
「ひうぁあっ！　ち、違ふぅ……ふぁわっ!?」
深々と牝穴を穿る硬木に奥壺を弾き上げられ、胎内に激震が走った。充血勃起した乳首が房肉にめり込むほど押し込まれ、美球を破裂しそうな切迫に見舞われる。
背骨から頭頂へと突き抜ける勢いでアナルを突き抉られた。
太い刀身から繰り出された快楽の暴撃に意識が跳ね飛んだ。限界だというのに身体がさらに快楽を貪ろうとくねり、木刀に肌を擦りつけてしまう。
下腹の底から膨れあがる灼熱が、緩んだ股間を押し広げ一気に溢れ出す。
「はぅううぅあぁぁっ!!　そんなぁ、これぇ、はわっ！　ひぃやぁあああぁあっ!!」
――ぷっじゃぁあああぁっ！　びじゅっ!!　べじゃぱぁあああっ！
前後の穴から絶頂汁を噴出させ、真琴は悲しみの表情を歓喜に歪ませ悶え狂った。
それでもなにか物足りない気分が体内に渦巻いている。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/